

〈報告〉

順天堂大学啓心寮での生活による寮生の心理的变化

—EQ と Social Skill に着目して—

藤井 雄斗*・山岸 明子**

Psychological change of dormitory students through life in Keishinryou
in Juntendo University:

From viewpoint of Emotional Intelligence Quotient and Social Skill

Yuto FUJII* and Akiko YAMAGISHI**

問題と目的

大学時代の寮生活は寮生にどのような心理的变化をもたらすのだろうか。本学は全寮制の寮生活を大学の特徴の1つとしており、全人教育の一環として、スポーツ健康科学部、医学部の学生は全員啓心寮に入寮し1年間の寮生活を行っている。寮生活をする事により、協調性や社会性、コミュニケーション能力を培い、また親密な友人関係を築くことが期待されていると考えられる。但しそのことを実証的に検討した研究は見当たらなかった。第一著者も周囲の友人も寮生活を通して自分が大きく変化したと感じているが、何がどう変わったのかは明確ではないため、寮生活が学生にどのような変化をもたらすのかを実証的に検討し、寮生活の意義を明確にしようと考えた。

大学生の寮生活に関する先行研究として、GiNiiで2つの研究があった³⁾⁴⁾、寮生活に適応していく

までの過程を明らかにしていくもの⁴⁾と、自他の迷惑行動、対人関係に関する認識を寮生と自宅生で比較するもの³⁾であり、心理的变化に焦点をあてるものではなかった。

本研究では、寮生活で培われる力として、EQとSocial Skillを取り上げる。EQとは「Emotional Intelligence Quotient」の略であり²⁾、日本語では「情動の知性」「心の知能指数」と訳され、「生きる力」につながる概念として注目されている。その定義はSalovey & Mayer (1990)によれば「情動状態を知覚し、思考の助けとなるよう情動に近づき、情動を生み出し、情動や情動的知識を理解し、情動面や知的側面での成長を促すよう情動を思慮深く調整する能力」であり⁵⁾、豊田・山本(2011)は「情動の調節」「自己の情動評価」「情動の利用」「他者の情動評価」の4つの尺度から成る質問紙を構成している⁶⁾、それらの能力は他者との交流を通して培われることが予想される。

Social Skillは、日本語では「社会技能」と訳され、社会性を技能としてとらえようとするものである。相川・藤田(2005)は「対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動とそのような対人行動の発現を可能にする認知過程との両方を包含する概念」とし、「関

* 順天堂大学スポーツ健康科学部
Department of Health and Sports Science, Juntendo University
現所属：廿日市市立阿品台中学校
Ajinadai junior high school

** 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University

係開始」「解説」「主張性」「関係維持」「感情統制」「記号化」の6つの能力をあげている¹⁾。

本研究では、EQとSocial Skill(以後SSと略記)が入寮して間もない時期と寮生活を経た後とでどの位異なるのかの調査を行う。更にそれらの得点が学部や性、所属する部活動の種類によって異なるのか、またそれらの得点と寮生活や大学生活への適応が関連するかも合わせて検討する。

方 法

調査対象

啓心寮の寮生—2012年度1年生452名(男子311名,女子141名)

調査時期

1回目 2012年5月19日から5月23日

2回目 2012年12月3日から12月9日

各回とも、寮で質問紙を配布し、回答は無記名で1人ずつ封筒に入れ密封して他者に見られないようにして、部屋ごとに集め、後日まとめて回収した。

質問項目

質問紙は、調査対象者の性別、年齢、所属学科、部活動(同好会)、競技歴、寮生活に関する質問と、以下に述べる尺度で構成した。

- 1) EQ—豊田・山本⁶⁾の日本版WLEIS(Wong and Law Emotional Intelligence Scale)の16項目(例「私は自分の気持ちをコントロールすることがとても得意である」(情動の調節)「私は自分の気持ちをよく理解できる」(自己の情動評価)「私はいつも自分を励まして全力で尽くせるようにしている」(情動の利用)「私は、他人の気持ちや感情に対して敏感である」(他者の情動評価))について4件法(かなりあてはまる4~まったくあてはまらない¹⁾)で尋ねる。
- 2) SS—相川・藤田¹⁾のソーシャルスキル自己評定尺度の35項目(例「相手とすぐにうちとけられる」(関係開始)「表情やしぐさで相手の思っていることがわかる」(解説)「自分が不愉快な思いをさせられたときには、はっきりと苦情を言う」(主張性)「気持ちを抑えようとしてもそれが顔に表れ

てしまう」(感情統制)「相手の立場を考えて行動する」(関係維持))について4件法(かなりあてはまる4~まったくあてはまらない¹⁾)で尋ねる。

- 3) 寮生活・友人関係の満足度については、著者2名で話し合い、寮生活のプラス面4項目(例「寮生活は楽しい」)、マイナス面3項目(例「寮生活はつらい」)、友人関係5項目(全体的な「友人関係に満足している」および大学でかかわる友人としてルーミー・部屋員・学科の友人・部活の友人)、学校生活・授業への満足の計14項目を作成し、4件法(かなりあてはまる4~全くあてはまらない¹⁾)で尋ねる。

結 果

有効な回答は1回目341名(男子217名(スポーツ健康科学部160名,医学部57名),女子124名(スポーツ健康科学部90名,医学部34名)),2回目246名(男子119名(スポーツ健康科学部91名,医学部28名),女子127名(スポーツ健康科学部97名,医学部30名))であった。回答した学生の平均年齢は18.68歳であった。

1. 合成変量の作成

日本版WLEIS16項目に対して因子分析を行い(主因子法,プロマックス回転),4因子解が得られた(各因子の寄与率は36.46%,11.69%,10.00%,8.17%,累積寄与率は66.31%)。第1因子で因子負荷の高い項目は「情動の調節」の4項目,第2因子は「自己の情動評価」の4項目,第3因子が「情動の利用」の4項目,そして第4因子が「他者の情動評価」の4項目で,前提通りにまとまったので,それぞれ4項目の合計点を算出し4つの尺度の得点とした。信頼性係数(α 係数)は各々0.86,0.78,0.76,0.86と高かった。

成人用ソーシャルスキル自己評定尺度も35項目で因子分析を行い(主因子法,プロマックス回転)7因子解が得られたが,適切な因子負荷を示さなかった12項目を除いて,23項目で再度因子分析を行った結果5因子解が得られた(各因子の寄与率は29.78%,10.34%,7.44%,6.95%,4.65%,累積寄与率

は59.21%)。第1因子で因子負荷の高い項目は「関係開始」の7項目、第2因子は「解説」の5項目、第3因子は「主張性」の5項目、第4因子が「関係維持」の3項目、そして第5因子が「感情統制」の3項目で、それぞれ項目の合計点を算出し、5つの尺度の得点とした。なお本研究では第2因子は「他者の感情理解」と命名した。信頼性係数(α 係数)は各々0.89, 0.83, 0.80, 0.66, 0.62と高かった。

寮生活・友人関係の満足度の14項目についても因子分析を行い、その結果に基づき次の3つの尺度を構成した(各因子の寄与率は41.13%, 12.48%, 8.68%, 累積寄与率は62.28%)。第一因子で因子負荷の高かった5項目を「友人満足」、第二因子の3項目を「寮満足」、第三因子の3項目を「寮不満」で、それぞれ項目の合計点を算出し、3つの尺度の得点とした。信頼性係数(α 係数)は各々0.83, 0.86, 0.80と高く、因子的妥当性も高く、信頼性・妥当性は高いと判断された。

2. 各尺度の1回目, 2回目の平均値の差

EQの4尺度, SSの5尺度, 寮生活・友人関係の満足度3尺度に関して, 1回目の調査と2回目の調査のそれぞれの平均値を算出し, t検定を行った(表1)。その結果, どの尺度においても調査の1回目と2回目で有意差は見られなかった。

3. 学部差, 性差, 所属クラブによる差

各尺度に関して, 学部別の平均値を算出し, t検定を行った。1回目の調査時にはどの項目においても有意な差はなかったが, 2回目の調査時にはEQの「情動の利用」と「寮満足」の2項目でスポーツ健康科学部の方が得点が有意に高いという結果が得られた($t=2.45 P<.05, 2.87 P<.05,$)。このことから, スポーツ健康科学部の学生の方が, ポジティブに寮生活を続けていることが示された。

男女別の平均値を算出しt検定を行った。1回目, 2回目共SSの「主張性」, 「寮不満」では男子の方が得点が有意に高いこと, 1回目はEQの「情動の調節」「自己の情動評価」でも高いことが示された。一方「友人満足」「寮満足」は2回共女子の方が得点が有意に高かった(2回目はSSの「関係維持」

表1 時期別のEQ, SS, 寮生活への満足度の平均値

	平均値 (標準偏差)	
	time 1	time 2
EQ		
情動の調節	11.83(2.47)	11.81(2.41)
自己の情動評価	11.48(2.34)	11.37(2.14)
情動の利用	10.59(2.50)	10.57(2.33)
他者の情動評価	10.19(2.65)	10.62(2.51)
Social Skill		
関係開始	18.17(4.48)	18.76(4.21)
他者の感情理解	13.75(2.95)	14.19(2.69)
主張性	12.34(3.07)	12.60(3.02)
関係維持	8.87(1.73)	8.95(1.49)
感情統制	8.00(1.80)	8.00(1.72)
友人 満足	16.16(3.06)	16.37(2.93)
寮 満足	9.72(2.20)	9.76(2.10)
寮 不満	7.18(2.22)	7.40(2.14)

も高かった)。2回の調査の結果から, 女子の方がポジティブに寮生活を送っているという傾向が見られた。

所属クラブ差に関して, 所属クラブを団体種目, 個人種目, その他(テニスのような両方の特性を備えているような部活)に分類し, 分散分析-Bonferroni法による多重比較を行った。有意差が見られたのは, 1回目の調査でEQの「情動の調節」「友人満足」「寮満足」において個人種目の部活に所属している者の方が値が低く, 「寮不満」では高くなっていた。2回目の調査でも, SSの「関係維持」「友人満足」「寮満足」では個人種目の値が低くなっていた。

4. 寮生活への適応感とEQ・SSの各尺度との関連

友人関係の満足度, 寮生活の満足度を寮生活の適応感として捉え, それぞれの項目の合計得点から満足度高群と低群の2群に分け, 各尺度の平均値を算出し, t検定を行った。(表2, 3)

表2 友人関係の満足度高群と低群におけるEQ, SSの各尺度の平均値, 及びt検定の結果

	time 1			time 2		
	友人高群	友人低群	t 値	友人高群	友人低群	t 値
EQ						
情動の調節	10.61(2.69)	9.63(2.47)	3.47***	10.99(2.67)	10.13(2.20)	2.76**
自己の情動評価	12.26(2.25)	11.26(2.64)	3.81***	12.53(2.26)	10.88(2.25)	5.78***
情動の利用	10.88(2.56)	10.17(2.35)	2.63**	11.11(2.23)	9.87(2.28)	4.36***
他者の情動評価	11.91(2.26)	10.88(2.29)	4.16***	11.81(2.15)	10.79(2.02)	3.86***
Social Skill						
関係開始	19.13(4.76)	16.72(4.41)	4.75***	19.81(4.07)	17.30(4.02)	4.93***
他者の感情理解	14.29(2.89)	13.02(2.90)	4.05***	14.77(2.52)	13.42(2.72)	4.07***
主張性	12.33(3.23)	12.31(2.84)		12.56(3.22)	12.69(2.69)	
関係維持	9.39(1.53)	8.20(1.70)	6.88***	9.55(1.28)	8.16(1.37)	8.35***
感情統制	8.09(2.02)	7.85(1.66)		7.99(1.83)	8.03(1.64)	

** P<.01 *** P<.001

表3 寮生活の満足度高群と低群におけるEQ, SSの各尺度の平均値, 及びt検定の結果

	time 1			time 2		
	寮満足高群	寮満足低群	t 値	寮満足高群	寮満足低群	t 値
EQ						
情動の調節	10.38(2.70)	9.91(2.55)		10.96(2.62)	10.27(2.34)	2.25*
自己の情動評価	12.20(2.36)	11.37(2.49)	3.18**	12.47(2.29)	11.08(2.34)	4.78***
情動の利用	10.93(2.43)	10.13(2.48)	3.07**	10.96(2.24)	10.15(2.36)	2.83**
他者の情動評価	11.87(2.28)	10.97(2.30)	3.67***	11.90(2.16)	10.80(1.92)	4.25***
Social Skill						
関係開始	19.01(5.15)	17.10(3.97)	3.90***	19.90(4.07)	17.55(4.04)	4.67***
他者の感情理解	14.24(3.01)	13.15(2.76)	3.52***	15.05(2.53)	13.25(2.55)	5.69***
主張性	12.50(3.36)	12.08(2.63)		12.67(3.29)	12.54(2.70)	
関係維持	9.32(1.60)	8.34(1.70)	5.55***	9.63(1.28)	8.22(1.35)	8.26***
感情統制	8.01(1.97)	8.00(1.75)		8.05(1.86)	7.95(1.65)	

* P<.05 ** P<.01 *** P<.001

友人関係の満足度の高低群は、各尺度の得点に関して1回目と2回目で同じ結果が得られた (cf. 表2)。EQは4つすべての項目で有意な差が見られ、どれも友人関係の満足度高群の方が有意に得点が高

かった。SSについても「関係開始」「他者の感情理解」「関係維持」の3つで友人関係の満足度高群の方が有意に得点が高かった。「主張性」「感情統制」では有意な差は見られなかった。

寮生活の満足度の高低群別の各尺度の平均値(cf.表3)も、EQに関しては1回目の「情動の調節」以外は全て寮生活の満足度高群の得点が低群よりも有意に高いことが示された。SSは、友人関係の満足度の結果と同じで、1回目2回目共に「関係開始」「他者の感情理解」「関係維持」で高群が有意に高く、「主張性」「感情統制」では有意な差は見られなかった。

考 察

1. 1回目と2回目の差について

寮生活によってEQやSSに変化がみられるという仮説の基に調査を行った。必ずしもプラスの方向への変化ばかりではなく、他者との長期間にわたる共同生活の中で自分というものを見つめ直すことでマイナス方向への変化もあるのではないかと考えていた。しかし結果は大きく異なり、2回の調査で有意な変化は見られなかった。その理由として以下のことが考えられる。

第1に調査時期の問題が考える。1回目の調査は寮祭という寮生にとって最も大きな行事が行われる直前であり、全体で協力して準備等を行い一番友人が増える時期であり、気分も高揚していたと考えられる。2回目の調査を行った時期は、他の学生の卒業論文の調査も多かったため、学生は回答に疲れて気分も低調で、回答数も減ってしまったと考えられる。

第2の理由として、本学の学生は入寮する以前から、EQやSSが高い学生が多い可能性が考えられる。スポーツ経験者が圧倒的に多いことや、本学に入学するにあたって集団討論や面接試験等で人間性も考慮されていること、全寮制ということを知りながら入学してくる学生は、ある程度対人関係に自信を持っていることが多く、寮生活によって得点が更に上昇するというのではないのかもしれない。

今後、より適切な時期に調査を行うことが必要である。また質問項目を改良したり、EQやSS以外の尺度も用いて、寮生活による心理的变化について更に検討することが望まれる。

2. 学部差、性差、クラブ差について

医学部とスポーツ健康科学部の学生の値にも違いが出ると考えていたが、これも有意差はほとんど見られなかった。スポーツ健康科学部の学生の方がコミュニケーションをとることが容易と感じていたが、それは彼らの社会性やコミュニケーション能力のためというより、同質な者同士であったからなのかもしれない。2回目の調査から、スポーツ健康科学部の学生の方が、ポジティブに寮生活を送っているという結果が得られたが、これも同質の学生数が圧倒的に多い方が楽しく楽に寮生活を送りやすいのかもしれない。

性差の分析の結果は、予想と合ったものだった。主張性はやはり女子よりも男子の方が有意に高いことが示された。女子の方が友人関係の満足度が高く、寮生活をポジティブに捉えており、相手に多少遠慮はしても男子よりもポジティブに生活を送っていることが示されたといえる。

所属するクラブによる差に関しては、個人種目の学生がEQの「情動の調節」で他の学生よりも低得点であったのは、1人で戦っていかなければならない状況の中で、焦り等から自己の情動を上手くコントロールできない場面に直面することが多かったのではないかと考えられる。また、友人関係や、寮の満足度においても有意に低得点であり、個人競技の学生は一人で行動することを好むような学生が多いことが示唆された。

3. 寮生活の適応感とEQやSSの各尺度との関係

寮生活の適応感と各尺度の関係については、友人関係や寮生活の満足度が高い学生の方が、EQ・SSともに有意に値が高かった。友人関係の構築や寮生活を上手く送っている学生というのは、EQやSSで測定できる社会性を持っているといえる。この結果は予想通りであったが、1つ気になることとして、友人関係、寮生活どちらも、SSの主張性とは有意な差が見られなかった。友人関係や寮生活を進めていく上で、相手を尊重しながら自分の意見を伝えていくことはとても大切なことだ。しかし本学の

学生においては、寮生活に適応している者は必ずしもそのような傾向を持っているとはいえないということが示されている。寮生活に適応していくため、ただ相手に合わせている学生が多いのではないかといったことが考えられる。更なる検討が必要である。

結 論

1. 今回の調査では、1回目の調査と2回目の調査でEQおよびSSのどの尺度にも有意な差は見られなかった。
2. スポーツ健康科学部と医学部の比較では、2尺度以外は有意な差は見られなかった。性差の比較では、約半分の尺度で有意差が見られた。所属クラブの比較では、個人種目の学生が他の学生と異なる尺度がいくつか見られた。
3. 寮生活の適応感と各尺度の関係では、寮生活に適応している者の方がEQやSSの多くの尺度で有意に得点が高かった。

今後、より適切な時期に調査を行うこと、また質問項目を改良することや、EQやSS以外の尺度で更に検討することが必要と考える。

〈注〉本論文は、第2著者の指導のもとに執筆された第1著者の平成24年度順天堂大学スポーツ健康科

学部卒業論文を元に作成されたものである。2回の調査にご協力いただいた24年度啓心寮の学生の皆様、寮監、寮の職員の方々に感謝します。

引用文献

- 1) 相川充・藤田正美(2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要 第1部門教育科学, 56, 87-93.
- 2) ゴールマン, D. (1995/1996) EQ~こころの知能指数 土屋京子(訳) 講談社.
- 3) 工藤恵理子(2002). 寮生調査報告—寮生と非寮生の比較— 青山学院女子短期大学総合文化研究所年報, 10, 71-101.
- 4) 大野愛子(2002). シオン寮在寮生の寮生活に関する意識 青山学院女子短期大学総合文化研究所年報, 10, 103-123.
- 5) Salovey, P. & Mayer, J. D. (1990). Emotional intelligence. *Imagination, Cognition, and Personality*, 9, 185-211. 2) による
- 6) 豊田弘司・山本晃輔(2011). 日本版WLEIS (Wong and Law Emotional Intelligence Scale) の作成 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 20, 7-12.

(平成25年3月13日 受付)
(平成25年5月31日 受理)